



Title	戸石泰一「玉碎」と太宰治「散華」をめぐる三田哲の覚書：翻刻と解釈
Author(s)	小澤, 純
Citation	太宰治スタディーズ. 2023, 7, p. 163-172
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/92828
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

戸石泰一「玉碎」と太宰治「散華」をめぐる 三田哲の覚書 ―翻刻と解釈―

小澤 純

キーワード：太宰治 散華 戸石泰一 玉碎 三田哲

一、はじめに——「三田循司関連資料」

太宰治「散華」（新若人）一九四四・三に登場する「三田君」は、アツツ島で戦死した三田循司（一九一七～一九四三）がモデルであることが知られている。また、同じく「戸石君」として登場する戸石泰一（一九一九～一九七八）は、共に太宰を訪ねた二高・東京帝大国文科の先輩である三田について、戦後、「散華」とは異なる視点から迫った「玉碎」（小説朝日）一九五二・九）を発表した。山内祥史「資料紹介 三田循司と太宰治——太宰治全集未収録葉書六通の紹介を中心に——」（『太宰治研究

18』和泉書院、二〇一〇・五）が三田をめぐる基本的な情報を、『太宰生誕100年三田循司資料特別公開記念 三田循司詩抄／太宰治短編「散華」』（日本現代詩歌文学館、二〇〇九・一〇）が同人誌に発表したり手帖に書き残したりした三田の詩作品を纏めている。稿者はこれまで三田の学生時代の日記をはじめとする日本現代詩歌文学館所蔵の「三田循司資料」の調査・分析を進めてきたが、調査の過程で三田だけを中心としては捉えられない資料も確認できたため、資料全体について「三田循司関連資料」という名称を用いてきた¹⁾。

本稿では、同館所蔵の「資料番号03600」「戸石泰一著「玉碎」コピー」に、三田循司の弟である三田哲²⁾（一九一九～一九九二）が書き残した覚書の全文を翻刻し紹介する。

二、三田哲の覚書・翻刻

早いもので 今年は 兄の三十七回忌
です

この小冊子は 兄の二高から東大と文
学の仲間であった 戸石泰一さんが
兄の軍隊時代の手帖などを参考にしな
がらかき上げた作品です

冒頭 ^ズ大宰治さん宛の兄の手紙が
のっておりますが その文面が私の記
憶している文面と少しちがっておりま
すので書きしるしておきたいと思
います

^ズ大宰さん お元気ですか

遠い空から おうかがい いたします
大いなる 文学のために死んで下さい
私も死にます

この戦争のために

(ちなみに兄が最も私淑してい

た詩人であり評論家の山岸

外史さん宛の兄の最後の手紙
は

「極烈に死ぬべく準備中」であり
家宛の最後の手紙は「元気」
の二字でした

私は何時の日か 兄の遺稿集をま
とめ上げたいと念じておりますが 未
だに果し得ないままに三数十年の
才月が流れました

いずれ兄の原稿を整理しなければなら
ないのですが まず三十七回忌に当り
兄を知る皆様に戸石さんの作品をお
おくりし 兄をしのんで頂きたいと思
います

尚 この作品をかかれた戸石さんもこの
世を去ってしまい 山岸さん、^ズ大宰さん
兄の文学を知っていた人は みんな婦
らぬ人となってしまいました
私はあらためて 才月というものをしみ
じみと知る思いです

三 田 哲

三、解釈——「大いなる」をめぐる磁極

本資料〔資料番号 93609〕は、三田の三十七回忌にあたり、おそらく哲が関係者に配布あるいは郵送した戸石「玉碎」本文を複写した小冊子（ホッチキス止め）であり、その表紙見返しには前節で翻刻した挨拶文めいた覚書が手書き・二段組みで綴られている。三十七回忌は三田の戦死から三十六年後に行つたはずなので、一九七九年のことである。戸石泰一が一九七八年一月三十一日に亡くなったことを受けて、「玉碎」の小冊子が配られたのであろう。ちなみに「玉碎」の本文は「小説朝日」一九五二年九月号からのコピーではなく、戸石が生前関わった文芸同人誌「群狼」第十二号（戸石泰一追悼特集号）（一九七九・二）の再掲版から、挿絵ごとコピーされている。同特集号には、鶴岡征雄「戸石泰一 年譜」が収められており、本稿執筆に際して参照した。また、三田循司のみならず三田家や三田の人間関係についての基礎情報等は、赤澤征夫によるHP「温故知新」〔<http://www.sekiou-ob.com/newmitajunji/top.html>〕、二〇一三・七・一閲覧）が大変参考になった。太宰は一九四八年、山岸外史も一九七七年に亡くなっているのので、まさに「兄の文学を知っていた人」が「みんな帰らぬ人になつて間もなく、哲は、「玉碎」本文にこの覚書を添えて、「兄の文学」の記憶を繋いでいこうとしたことになる。

哲は、「散華」と「玉碎」とでは三田から太宰に宛てた書簡の内容にずれがあり、自身の記憶を頼りに、「散華」の文言が正しいことを仄めかしている。しかし別稿で既に触れたが、哲の記憶の中の三田循司書簡は、「散華」のものとも微妙に異なっている点は大変気になる。哲もまた「記憶」に依拠していると明記したのは、兄の遺品である書簡が手許にはなかったということであろう。「散華」本文では、「弟さんは遺稿集に就いての相談」のために上京し「山岸さん」と「私」（太宰がモデル）との三人で話し合う。「私」が「開巻第一頁に、三田君のあのお便りを、大きい活字で組」みたいと主張したというエピソードからも、戦中に哲が書簡を実見したことは確かだと思いたいが、現在、当該資料の所在は明らかでなく、太宰家にいつまで保管されていたのかも分からないし、本当に存在したかどうかも実は確定し得ない。現物の展示や写真の公開は、一度もない。

例えば、三田の遺稿集の編纂や三田を主人公にした作品を執筆しようとした山岸が借り受けたままだったのか、八雲書店の『太宰治全集』の仕事を委嘱されたり檀一雄『小説太宰治』（六興出版社、一九四九・一一）の「年譜」を編んだりして太宰家への出入りもあつた戸石（一九四八年一月から一九五一年六月頃まで三鷹下連雀に住み桜桃忌にも関与）が「玉碎」執筆時に書簡を実見できたのか、いずれも可能性はあるが確証はない。ただ哲は、太宰や山岸とのやりとりをその後も続けたし、哲の「三冊の手帖」（『展』創刊号〈特集戸石泰一〉、一九八〇・一一）

によれば、米沢に疎開していた山岸の元に転がり込んだこともあり、また戦後には上京して暮らし毎日のように戸石と交流していたともある。太宰が三田から受け取った書簡を、戸石と同様に、慥が戦後にも再確認していた可能性は等しくあり、その上で、三者三様の三田書簡のヴァリエーションの由来についての想像していくしかないだろう。参考までに、「散華」と「玉砕」の書簡の文面を順に引用する。

・「散華」

御元氣ですか。／遠い空から御伺ひします。／無事、任地に着きました。／大いなる文学のために、／死んで下さい。／自分も死にます、／この戦争のために。

・「玉砕」

先生／死ンデ下サイ／文学ノタメニ／私モ／死ニマス／大イナル戦争ノタメニ／（三田循司・太宰治宛の手紙）

森田實蔵「太宰さんの思い出」『太宰治研究3』和泉書院、一九九六・七）以来、戸石が書簡を美見し書き写している可能性が高いことや太宰の作家的特性から、現時点では山内前掲論考等、太宰の側が「創作」であると強調されるようである。しかし慥が三田の身内であることを差し引いたとしても、慥の覚書での主張をただ見過ごすことは躊躇される。三田の他の書簡を日

本現代詩歌文学館で確認したところ、まず片仮名で手紙を認めることはなく、戸石によるエピソードでの表現は太宰「右大臣実朝」錦城出版社、一九四三・九）を意識した書法とも考えられ、戸石の側に「創作」がなかったとは言い切れない。

掲載誌「小説朝日」はいわゆる中間小説誌のはしりであり、「玉砕」は一九五二年九月号の「特集戦記文学」に火野葦平「イワラジ河を降る」、柴田錬三郎「沖繩心中」、宮内寒彌「呉海軍夫人部隊」と共に掲載され、目次にはリード文「北辺の孤島アツツに倒れて行つた学徒兵の手記、玉砕した部隊の真相は……」が添えられ、読者に作品の見所をアピールしている。また二カ月前に刊行された「小説朝日」夏の臨時増刊話の手帖」（一九五二・七）には、戸石「ア号作戦珍兵器列伝——あらゆる困苦欠乏にたえつつ創意工夫し科学的新兵器に対抗する涙ぐましき話——」が、大下宇陀児「風雲アキ屋親父伝」と榎本捨三「銃殺志願集団」に挟まれ掲載されており、「忍術訓練」をはじめ、物量に差がある対アメリカ戦での「創意工夫」が虚実織り交せて列挙される。この娯楽に寄つた作品の掲載を経て、駆け出しの作家であった戸石には晴れ舞台と捉えられる雑誌に「玉砕」が掲載された点には留意したい。

推測の域を出ないが、「特集戦記文学」の読者にとつて、「大いなる文学」ではなく「大イナル戦争ノタメニ」死ぬことを師である太宰に戦地から訴え戦死する「三田循司」という主人公像の方が、わかり易く刺激的な構図で戦争の（悲劇）を伝える

ことができたとも捉えられる。サンフランシスコ講和条約が発効し、GHQによるプレスコードが解除された時期に近いなか、しかも太宰没後であり、「散華」に引用された書簡を改変しても戸石は創作の師から咎められる心配はなかった。一九五二年当時、太宰の「散華」は戦後に出版された創作集や全集類に収録されておらず、掲載誌「新若人」や戦時下の創作集『佳日』（肇書房、一九四四・八）を所持していない読者には比較できなかったし、そうした読者は限りなく少なかったのではないか。

しかし、太宰文学の本文の管理にも携わった津島美知子や三田の遺族の目には、「散華」と「玉碎」における書簡の文言の違いはどのように映っていたのか。前掲「三冊の手帖」によれば、慙は花巻に帰郷した後も、月一回のペースで上京するたびに戸石に会っていたようだが、結局、戸石は生前に「玉碎」を単行本に収録しなかったことも気に掛かる。もちろん、戸石が実際の書簡を改変した可能性がある一方で、むしろ太宰が原文を改変することで成立していた本来的には戦争と距離を置く「三田循司」像を、戸石が事実に基づいて崩したという可能性も残されたままである。

実際の三田の太宰宛書簡が発見されない限り結論は出ないが、それでも「大いなる」／「大イナル」という言葉が「文学」に向けられているのか、それとも「戦争」に向けられているのか、その差異の大きさについては考察する必要があるだろう。森田が前掲の文章で指摘しているように、太宰が高く評価した三田の

詩「高架」（「芥」三号、一九四一・三）には、「闇夜虚空に鍛へられて光を發し／厲しき精神を散華せり」（九・一〇行目）という箇所があり、太宰「散華」の表題と言葉を響き合わせているが、同時に第一行目は、「ああ満天星空大いなるかな」と始まるのであり、「大いなる」の一語が、「一列に日をとも」す「人々の世界」（二行目）と対比される「星空」への感嘆に用いられている。「大イナル戦争」よりは、「大いなる文学」に寄り添った使い方であろう。

ただ同時代の詩の領域においては、時局的な詩を多く含む高村光太郎『大いなる日に』（道統社、一九四二・四）の表題や収録された詩の用例を見逃すわけにはいかない。「序」には以下の文言がある。

支那事変勃発以来皇軍昭南島入場に至るまでの間に書いた詩の中から三十七篇を選んでここに集めた。ただ此の大いなる日に生くる身の衷情と感激とを伝えたいと思ふばかりである。／昭和十七年三月／高村光太郎

光太郎は同詩集の中で日本軍勝利を言祝ぐ詩を幾篇も収めているが、詩集全体のコンセプトを余すことなく伝えた序文であろう。また、シンガポール戦が始まった翌日の一九四二年二月九日夜に書かれた「ことほぎの詞（初出「讀賣新聞」一九四二・二・一一）は、「久しいかな、一千六百二年。／さかんなるかな、

けふのこのよき日。／始馭天下之天皇。／樞原宮に大基をはじめたまひてより、／かくの如き大いなる日あらんや。」で始まり、「今上陛下指さしたまふところ、／あれらよろこびおもむくななり。／あきらけきかな、大いなるかな、けふの賀節。」で締め括られる。まさに、「大いなる」と「戦争」の二語はウルトラナショナルリズムに溶け込み接続するのである。現存する三田の日記の最後の日付は太平洋戦争勃発の日である一九四一年一月八日（月）であり、偶然にも徴兵検査を受ける日であった。そこには「Radioのnews 次々と楽曲の放送。／Announcerの緊迫した声。／徴兵検査の朝に宣戦の報。／ものすごい。ものすごい。／みんな しつかり ゆかう。／ほんとうに一億一心だ。／ああ俺もゆく。」といった昂奮も書き付けられていて、光太郎の戦時下の詩群と近い心情を読み取ることも可能であろう³。

別稿で触れたことを纏めれば、三田は同郷花巻の詩人・宮澤賢治に傾倒し、未定詩稿「宮沢賢治先生の詩碑の前で」を書き残したり賢治の弟・清六と交流し手帖や原稿を見せてもらったりしているが、賢治を同時代に高く評価したのは光太郎であり、花巻にある賢治「雨ニモマケズ」詩碑（一九三六年一月建立）の詩の一節を揮毫したり、賢治の全集刊行にも関わったりしていた。戦時下の賢治ブームの只中、三田は、一九四一年二月七日の日記で「雨ニモマケズ」の新聞切り抜きをしているが、それは同時期に「朝日新聞」に連載されていた火野葦平『新しき地図』（一九四〇・一一・六〜四一・五・二二）の一九四一年

二月一七日掲載の第七二回分からであり、戦傷した帰還兵であった主人公・青地千太郎が銃後での総動員体制に順応しようとしていく際に、「雨ニモマケズ」が精神の支えとなっていく箇所である。構大樹「宮沢賢治はなぜ教科書に掲載され続けるのか」（大修館書店、二〇一九・九）は『新しき地図』の賢治表象を含めアジア太平洋戦争中の賢治受容の危うさについて詳述しているが、「大いなる」がいずれの言葉を修飾するにせよ、「散華」に書き込まれた「純粹の献身」の一語との親和性については注意しておきたい。

もう一点、三田と光太郎の接点として重要なのはオーギュスト・ロダンである。山内の前掲論考では、入営後の三田が山岸に深く傾倒していったのは、山岸「ロダン論―或ひは私の彫刻論―」（赤門文学）一九四二・九、「ロダン論（続き）」（同、一九四二・一〇）を読んだからと述べており参考になるが、三田の日記を読めば、三田が山岸のロダン論発表以前にロダンに関心があったことが分かる。日本におけるロダン受容の先駆者は光太郎であり、明治末から大正期にかけてロダン論やロダンの翻訳を精力的に発表した。昭和期に入っても光太郎による評伝『アルス美術叢書 ロダン』（アルス、一九二七・四）が多数の写真版入りで上梓され、一九一六年五月に阿蘭陀書房から刊行された光太郎訳『ロダンの言葉』と一九二〇年五月に叢文閣から刊行された『続ロンの言葉』が、一九三七年九月に叢文閣から再刊されている。

三田の一九四二年九月二六日(金)の日記には、「Rodinの彫刻の素晴らしき、／それこそ芸術だ！／素晴らしい、／一瞬に感受されるほんもの／の芸術性／稲妻だ。」とあり、続く二七日(土)では、「高村光太郎訳『続 Rodin の言葉』／Rodin のことば 若き芸術家に」／感激した、／一寸見渡した所、／Rodin の彫刻が一番びつたり来る、／全的に。」と書き進め、光太郎訳によつて読んでいることも分かる。二八日(日)には、「今、いのちこそ神、ではないかと、Rodin に／示唆される／Rodin 『生命、此の驚異』と叫んだ。／Rodin に対して、最も／親接な 芸術的血脈を感じる。／それは彫刻だらうか？」と記した後に、「すべてに見棄てられた」／この痛烈なる孤独感のどん底に／於いて、『神のみぞ我を見守る』／といふ痛烈な歓喜が湧き／立つて来ないだらうか。神の寵児、／その幸福感！』という箇所があり、太宰からの一九四一年九月八日付三田宛書簡にあった「神の寵児」を用いた入院中の三田への励ましの言葉に呼応し、ロダンへの共感を交えながら自ら詩人であらんと欲する気持ちが芽生えつつあることが分かる。学生時代の最後の日記ノートの裏見返し部分には「Rodin」と記されていることも興味深い。

ところで、九月二七日(土)の日記の後半部分には、「ああ溜息が出る、感嘆する、／Rodin の彫刻には。／美とは Nothing である、／我々人間は、たゞ 真をさがし求め、／それを最大限にまねれば、それでいゝ。／美はそこに自ら下りて来る。／

Rilke の Rodin は「。」とある。この時期、リルケのロダン論の翻訳は、ライナー・マリア・リルケ／石中象治『ロダン』(弘文堂、一九四〇・八)とリルケ／高安國世訳『ロダン』(岩波文庫、一九四一・六)が続けて上梓されており、そうしたリルケを介したロダン・リバイバルの只中に、三田のロダンへの関心や、山岸の『ロダン論』(育英書院、一九四四・一)に結実するロダン論(リルケに触れる)の執筆があったと考えられる。また三田はリルケへの関心も深めており、徴兵検査直前の二月五日(金)には、「Rilke 神様の話を昨夜よんだ。マルテの手記をよんでみる。／マルテの方がずっといゝと思ふ。神様の話——よくわからない所が多かつた、／俺に sense がなかったらう？／Rilke の sense と(思念の深さ)には／おどろく、かなはないと思ふ、」とあり、学生生活の最後まで、詩人リルケに仮託しながら、詩を想い詩に苦しむ様子が伝わってくる。それは、翌日の二月六日(土)に、「兵士になる。それもいゝ。信じる。／しかし いゝ詩が書きたい。行く前に。／どうかして、必ずつくらう。／このまゝでは死ねない、／このまゝでは死ねない、／どうしても いいものを書かねば。」と綴らざるを得なかつた、詩人として生きることへの希求と表裏一体であつたはずだ。

三田は一九四一年の夏頃、いわゆる花柳病で入院を余儀なくされていることが日記や太宰書簡(及び幾つかの「三田循司関連資料」)から読み取ることができ、当時の混乱が窺える日記ノート中の乱雑なメモ断片の中には「高村光太郎『美につい

て「智恵子抄」などとあり、九月二日（日）には、「しかし高村光太郎は音楽性を詩の／属性の一つと看做し、そのすべてではないと／云つてゐる。果してさうか。わからない。」と自問するためのきつかけにしていた。退院後、ロダンやリルケをはじめとした諸芸術や詩に肉迫していこうとする紆余曲折を、日記から読み取ることができるとして戸石は、これらの日記群を経て三田が入営地で密かに執筆していた、現在は所在が不明になっている三冊の手帖を三田家から借りて参考にしなげら、「玉砕」を執筆したのである。今では、「三冊の手帳から」（「展」二号、一九八一・九）に抜き出された詩群と戸石が「玉砕」で引用した一部分しか読むことがかなわないが、それでも例えば一九四二年八月三〇日（日）に手帖に書かれた詩の言葉には、学生時代以後も続いた三田の詩作への意志が明滅している。

雨雲がしだいに低くあつまつた

野づらを掠めて

（また舞ひ上りつつ）

いくまんの白蝶々が南へ急ぐ

まだアツツ島という「任地」に着く前の詩であるが、学生時代の詩に比べると、簡潔な描写と「いくまんの白蝶々」の取り合わせに、戦争という情況を生きる象徴性が息づく。以上のこ

とを踏まえながら「大いなる」／「大イナル」の問題を考えていく時、「任地に着」いてから太宰に送られたとされる書簡を実現することはできないにせよ、その遙か「遠い空」と交信し続ける「散華」の「三田君」は、「三井君」のような「神のよほどの寵児」という極限の存在とはならず、それでも「神の寵児」たる「詩人」（「心の王者」、三田新聞一九四〇・一・二五）として「天使」に喩えられたことは見逃せない。「三井君」の無為な「比類が無い」「美しい臨終」を通奏低音として遍く過去・現在・未来の「死」を担保することで、「純粹の献身」という同時代の（光太郎も加担した）賢治受容とも共振する磁場へと、「散華」の読者を甘美に誘ったものではなかったか。例えば賢治の「グズコ―ブドリの伝記」（児童文学一九三二・四）の自己犠牲的な結末に「純粹の献身」という言葉を与えたとしても、アジア太平洋戦争末期の言説空間の中では違和感はないだろう。

ただ「散華」の「私」の立脚点は、あくまで生きている側から、「人の世の最も美しいもの」へと「あこがれ努力」することに局限されているとも読み得る。北川透が多くの戦争協力的観点からの批判を検討した上で、「散華」のなかの（私）が親和感を抱くのは、真面目で純粹な三田君ではなく、トンチンカンな道化役を演じる戸石君だったことを思い起こすべきだろう」と指摘したことは、現在も有効であろう。また、「私」の書簡への感動からは巧妙に「三田君」の「死」が抜き取られているとした松本和也の指摘⁷⁾も、「大いなる文学」というレトリックの要所

に切り込み示唆に富む。出来事として起こってしまった「死」については「純粹の献身」の結果として受け容れつつ、しかし「私」は「小説家」のまま、いわば「遠い空」へと「あこがれ努力」し、この具体的な生の「トントンカン」な過程に足場を置く。三田の詩「高架」も、「ああ満天大空大いなるかな」と、「人の世」から「大空」を見上げる視座であった。そして、「友を送りてこの高架の橋去りがたく／人間愛心の美しさに涙吞まんとす」（一・一二行目）という「去りがた」いまま涙する絶唱に、「散華」という言葉が与えられていた。

同じ言葉に宿るニュアンスの違いに拘るならば、「大いなる文学のために、／死んで下さい。」という場合の「ために」は、目的や能動性を主に表しているように解釈できるが、倒置法が用いられた「自分も死にます、／この戦争のために。」には、原因や受動性が自ずと表されたようなニュアンスがある。「三田君」から届いた書簡に、まず「私」は「なんとも尊く、ありがたく、うれしくて、たまらなかつた」という感情が溢れ、再び書き写すことで「崇高な献身の覚悟」という内実を読み取ったが、心に響いていたのは「死んでください」という「一陣の涼風」を感じた語句であり、「私も死にます」以下の箇所ではない。しかし、遺された三人で「遺稿集」を編もうとする段になって三度目に書き写す際には、「あのお便りの言々句々が好きなのである」と述べることになる。

つまり、能動的に「文学」への「純粹の献身」を「私」に迫る

「三田君」の姿だけではなく、「この戦争」という出来事へと受動的に巻き込まれたために、自らを「大いなる文学」とは隔たった「遠い空」との交信役に位置付けなければならなかつた。「三田君」の幽かな声が、「言々句々」の連なりの裡に反響していた可能性も残される。その受動性に曝される生からの切迫した訴えはまた、「大イナル戦争ノタメニ」という「言々句々」にも、等しく響いているのではないか。

三田哲は、前掲「三冊の手帖」に戸石との長い交流の最後の一幕を書いている。「戸石泰一年譜」に拠れば、一九七四年五月のことであろう。

私が戸石さんと最後に会ったのは文学同盟主催「文学のふるさとを訪ねて」に同行し、再び花巻を訪れた時である。高村光太郎の山居、宮沢賢治の碑、成島の毘沙門天様と一緒にバスで回りながら、これが戸石さんと相会う最後になるとは夢にも考えはしなかつた。

しかし、その時花巻でバスをおりた戸石さんは殆ど酒を口にしなかつた。

花巻の廣隆寺には三田家の墓所があり、山岸外史が揮毫した三田循司の碑がひっそりと佇む。戦争末期から敗戦後の八年間、光太郎が宮澤家を頼りながら花巻で自責反省の生活を送ったことを、多くの兄の遺品を生家に眠らせながら、哲はどのように

感じていたのだろうか。また戸石が三冊の手帖を三田家から借り受け、「大イナル戦争ノタメニ」の文言がある「玉碎」を発表した時、長い付き合いが後々まで続くとはいえ、怒はいかなる想いを抱きながら戸石と接していたのか。

直接尋ねることは既にできないが、三田循司をモデルにした二つの作品の誕生に立ち会った哲による覚書によって、私たちは、その沈黙したままの出来事的一端に、僅かながらでも想像力を働かせるしかない。

注

- (1) 拙稿「資料紹介・研究ノート」「三田循司関連資料」(日本現代詩歌文学館所蔵) 調査報告——太宰治「散華」と、三田循司日記の部分翻刻(稿)を中心に——(慶應義塾志木高等学校校研究紀要)二〇二二・五、他に「那珂太郎と太宰治の一九四三年九月——三田循司資料」から発見された那珂太郎の戦中日記(現代詩手帖)二〇二二・九、「那珂太郎戦中日記」上・下(翻刻)日本現代詩歌文学館、注1稿者、「現代詩手帖」二〇二二・九、一〇)。

- (2) 拙稿「太宰治「散華」と三田循司関連資料」の教材化と三年見学旅行——附:三田循司の未定詩稿「宮沢賢治先生の詩碑の前で」翻刻(慶應義塾志木高等学校校研究紀要)二〇二二・四)なお、荒井大樹氏によるHP「井伏鱒二と荻窪風土記と阿佐ヶ谷文士」内の「太宰治と新発見の「那珂太郎」戦中日記」をめぐって「太宰治を訪ねた出陣学徒たち」堤重久・三田循司・・・(二〇二二・六、<http://origkabo-bunshi.a.taj9.jp/td-sange.html>)二〇二二・七・一閲覧)に

て、注(1)(2)に挙げた拙論・翻刻を参照した論考が掲載された。荒井氏の(阿佐ヶ谷文士)をめぐる発信には学生時代から多くのヒントをいただいております。念に堪えない。

- (3) 以下、三田の日記については前掲注(1)「資料紹介・研究ノート」での翻刻に基づく。

- (4) 前掲注(2) 論文

- (5) 前掲注(1)「資料紹介・研究ノート」にて同書簡の翻刻と解説をしている。

- (6) 北川透「文学の一兵卒——太宰治「散華」について」(『日本文学研究』一九九九・二)

- (7) 松本和也「散華」における「小説」と「詩」(『内海紀子・小澤純・平浩』編『太宰治と戦争』ひつじ書房、二〇一九・五)

↓松本和也『文学と戦争——言説分析から考える昭和二〇年代の文学場』(同、二〇二二・一一)

[附記] 本稿執筆にあたり、貴重な資料の使用許可をいただいた。

遺族の佐々木比子氏、調査・翻刻において大変お世話になった、豊泉豪氏をはじめとする日本現代詩歌文学館のみなさまに厚く感謝申し上げます。